

日本のナショナリズムを探る



慶應大学助教授

小熊
英一
さん

反戦デモは政治的関心の表現

イラク戦争に対する反戦デモには、これまでにない新しさがある。参加者は、学生さうの若いカップルや、散歩途中のような中高年、子連れの夫婦などがほとんど。いかにも「デモ」的な既存の政党や労組が動員した人々が放つ統制感はない。それでも、参加者は何の屈託もなく、真剣に反戦を訴えている。

「彼らは日本住民の平均的集團。ただ自発的に参加しているのだが、それが何万人の規模で集まっている。組織動員なしでこれほど人が集まつたことは、実は戦後の歴史の中でもあまり

訪問曜日



「ないのです」と、慶應大学助教授の小熊英一さんは語る。

た。「民主」と「愛国」（新曜社）で丸山眞男、竹内好、吉本隆明、江藤淳、鶴見俊輔らの戦後思想の特質を、彼らに刻印された“世代的、個人的な戦争体験の思想化”として鮮やかに解き明かした。同時に、その特質が最大の弱点となって、戦争を体験していない世代と共有できる言葉を創造できなかつた結果、戦後思想の風化を招くとともに、戦後日本が「平和主義や民主主義に

文化

もとづいたナショナル・アイデンティティー」を形成できなかつたことを指摘した。



「戦後、日本では政治的関心を『ナショナリズム』の言葉で表現する回路をうまく作れなかつた。六〇年安保闘争など、できそうな局面は幾度もあつたけれども、冷戦構造と対米従属関係の中で、成立しなかつた。冷戦と経済成長の終焉とともに思想状況は流動化したが、政治的関心を語る新たな回路はやはり見つかっていない」と小熊さん。

「最近の反戦デモも、政治的関心を表現しようとする表れの一つなのかもしれません」人々の政治への関心を時代ごとに表現してきた言葉。その歴史的意味を明らかにし、現代において新たな言葉が生まれる可能性を探る。小熊さんの研究テーマはそこにあるようだ。

『「民主」と…』でも、数々の戦後思想が、人々に受け入れられ、忘れ去られていった過程は、「民主」「愛国」の二語に託された意味の変容の歴史として与えられている。混乱と改革の時代だった一九五四年までの「第一の戦後」では、「民主化によって平和な日本を作ることが真の愛国だ」という期待のもと、「民主」と「愛国」が一つの「心情」を表現できた。しかし安定と成長を特徴とする五五年以

降の「第二の戦後」には、これらが革新と保守という対立する主張を代表する言葉となつていく。膨大な資料の徹底的な読解と、緻密な分析で裏付けられた論は、幅広い世代から絶賛を浴びた。一方、この徹底ぶりが現代の知識人の戦後認識の浅さも浮き彫りにした。

現在の反戦運動の参加者を突き動かす「何か」が今後、言葉として結実するのかどうか。小熊さんは「何とも言えない」。ただ、「組織動員が衰退する一方、自発的、突發的に人が集まるという現象は、既に薬害エイズや沖縄の基地問題の時にもありました。この十数年間で徐々に醸成されてきたという見方もできる」とも。その経験は一語で共感も忌避も呼ぶ「戦争体験」より柔軟なのかもしれません。

他方、その同じ「何か」が急進的な民族主義や反米主義としてまとまり、暴発する懸念はないのか。「最近の反戦デモの特徴の一つは、老若男女が混在していること。かつての全兵闘や新左翼のように『若い男ばかり』ではない。機動隊との衝突などはありえそうもないし、暴発に走る危険も少ないと思う」

一九六二年、東京都



生まれ。東京大学卒業

後、出版社に勤務したが「もう一度勉強したくなつて」九三年に大学院に。その時、著した修士論文『单一民族神話の起源』が好評を得て、研究に専念することに。大学で受け持つゼミ学生の印象を「過大な夢は語らないが、情報が行き渡つて地に足がついていて、素直。七〇年代の内ゲバなどの後遺症で形成された社会運動への忌避感もようやく薄れて、柔軟に受け入れている」と評する。「彼らは動くときは動く。そう思いますよ」

(三沢 典丈)